2018.7.20

博物館 Dictionary No.211

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館3F-2（考古）に展示されている作品について勉強してみよう。

埴輪 男子像
―人物埴輪はなぜつくられたの―

1．埴輪が樹てられた時代

弥生時代の後、およそ紀元300～700年頃までを古墳時代と呼んでいます。この時代は日本でもっとも巨大な墓が造られた時代でした。大阪府の大仙陵（伝仁徳天皇陵）古墳は全長約500 mもある最大の前方後円墳で、世界でも最大の墓の一つです。なぜこのような大きな墓が築かれたのでしょうか。

弥生時代はムラの時代でした。稲作をはじめとした農業を基礎にしたムラが営まれ、リーダーや一般の農民などはそれぞれの立場にしたがって住み、住居や建物・柵などの風景は人々の立場やつながりを表しています。リーダーを葬った墓も地方によってさまざまな形をしていました。

ところが、古墳時代は前方後円墳を中心とした古墳が東北から九州地方まで造られ、このような社会の仕組みが墓造りに表れた時代です。リーダーはムラの外に溝などで囲まれた居宅を定め、人々をまとめてゆきました。そして、古墳は各地域で豪族と呼ばれるようになったリーダーと地域の人々が互いに立場を確認するための儀式を行う場所でもあったのです。

図1　重要美術品　埴輪 男子　古墳時代（6世紀末）
群馬県太田市脇屋出土　京都国立博物館蔵

2．埴輪の役割

埴輪(図1)は古墳が現れた時から樹てられた墳丘を飾る焼き物です。古墳造りの風習の拡大とともに、岩手県から鹿児島県まで拡がりました。最初は弥生土器形の埴輪でしたが、やがて建物やさまざまな武器、儀式に使う道具の形の埴輪が現れ、各種の儀式を象徴的に表していたと考えられます。

そして５世紀末頃になると、新たに動物・人物形の埴輪が登場し、葬送の儀式に関わ

るさまざまな場面を具体的に表すようになったと考えられています。
人物埴輪は大きく男女像に分かれますが、全身像と下半身を省略した半身像があります。全身像は主に主役、半身像は脇役として表現されたようです。このように、埴輪は古墳造りと共に行われていた当時の儀式の様子を知るために大変貴重なものです。

３．古墳時代の人々

次に、古墳時代の人々の服装を見てみましょう（図２）。当時の服装は上着と、男子がズボン、女子はスカートが基本です。弥生時代の貫頭衣と呼ばれるワンピースに比べ、現在と同じツーピースであることが判ります。このような服装は、中国西方（中央アジア）の胡族と呼ばれる遊牧騎馬民族の服装（胡服と呼びます）が中国・朝鮮半島を経て伝えられたと考えられています。

図２「古墳時代の人々」に加筆、白石太一郎編
『学習漫画 日本の遺跡なんでも事典』集英社、1990年

一方、頭や首、胸・腕や腰にはさまざまな冠・帽子や装身具をはじめとして、武器や仕事の道具などさまざまな持ち物を身に着けて表現されています。髪の毛は男女いずれも長髪で、男子が美豆良と呼ばれる顔の左右で振り分ける髪型、女子が頭の上で前後に分けて束ねた髪型をしています。
これらの特徴から、人物埴輪には立派な服装の男女のほか、武人・文人や巫女・狩人・楽人・力士・農民などなど、さまざまな職業の区別があり、身に着けている服装や持ち物などで、当時の社会における役割の違いが表現されていたと考えられます。もちろん、さまざまな儀式においても役割の分担があったことでしょう。

４．埴輪 男子の役割

さて、この埴輪（図１）は頭には菅笠風の帽子を被り、髪は耳のあたりで束ねた上げ美豆良と呼ばれる髪型です。首には玉を連ねた首飾りを着け、腰には大刀を佩いています。左手は帯を締めた腰に当て、右手で鍬を担いでいます。鍬は農工具で、農業や土木作業に使用した代表的な道具です。この埴輪は半身像なので下半身は省略されていますが、ズボンを穿いていたと考えられます。大刀は一般の農民が身に着けていたとは考えられませんが、上げ美豆良は身分があまり高くない普通の男子を表しているとみられます。
このように、この人物は上げ美豆良で農工具を手にしていることと、被り物・首飾りや大刀を佩いている特徴から、農工具で作業をする人々をまとめる仕事をしていた人物であるかもしれませんね。
もう一度しっかり観察して、農民や大刀を佩いた人々の役割を考えてみてください。

（考古室　古谷 毅）